

冬めづきに
春目となふと
思はず

ともにあゆみ
後ろのふたふた
おれこそあまの
甲子

著者の人

著者遺筆

ママハハ物語

著 者 宮迫千鶴

発行者 小田久郎

発行所 株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三一十五

電話(二六七)八一四一(代表) 振替東京八八二二

印刷・製本 凸版印刷株式会社

発行日 一九八七年三月二十五日初版第一刷 一九八八年三月一日第四刷

定 価 一四〇〇円

ISBN4-7837-1487-8 C0095 ¥1400E

目次——立原正秋初期作品集

八月の午後と三つの短編

五

八月の午後

七

殺し屋

五

女乞食

三

心中

三

乾いた土地

四

聖クララ村

七

美しい村

一七

風の姿（和歌三十五首）

一九

若き日の立原正秋

小川国夫
二〇五

初出紙誌・一覧

三三

装画・高山辰雄

八月の午後と三つの短編

八月の午後

人気がない乾いた道に午後の陽が真上から照りつけていた。左側は高台で、木立のあいだに邸が点在していた。右側には道に沿って小さな川がながれており、川向うにも乾いた道が続いていた。その向うは家がならんでいた。

周子は、日傘をもつてでなかったことを悔いながらハンカチで顔の汗をふいた。日蔭がなかった。道の高台よりの側には、梧桐あおぎりの並木があったが、まだ丈たけが低く、痩せていた。

高台の向うで郊外線の走る音がした。

周子は土ぼこりをあげまいとして下駄に足裏をびったりつけて歩いた。

川幅が狭くなり、川向うに渡る土橋の近くまできたとき、周子は、川向うの道を灰色の日傘をさして歩いている川辺家の老母をみた。老母は瀟洒しょうしやな茶色の無地のワンピース

イスを着ており、白いハイヒールをはいていた。そして右手に水の滴る風呂敷包みをさげていた。周子は、包みが角ばっていたので氷だろうとおもった。そして、あそこの老母が氷を買いにでるなんて、どうしたのだらうといぶかった。周子は数年前に一年間だけ老母からフランス語を習った。

周子は土橋を渡り、老母に追いついた。老母のフランス帰りはいたについており、端麗な歩きかただった。

「おばあさま、御機嫌よう」

周子は老母の右側にならんでたつと、あいさつした。

「ああ、周子さん、どこのお帰り？」

「歯医者さんに行ってきましたの」

「お若いのに歯がね……」

「それおもしろいしょう」

周子が空いている左手をだすと、

「そうですか。では、おねがいしましょうか」

老母は氷包みを周子に手渡した。

「ずいぶんおあいしませんわね。まだ習いにいらっしゃるお方、大勢いらっしゃるんでしょう？」

「去年からおことわりしております。わたしはもう、動詞の変化をすっかり忘れてしまひましてね」

やがて二人は川が右に折れている三叉路にきた。老母の邸は左の小学校沿いの道を行き、高台の森のなかにあった。周子は右に行けばよかった。周子はちょっと迷ってから、お家までおもちしようといった。

「そうですか。それは申訳ありませんね」

「つくまでにとけてしまわないかしら」

「なに、大丈夫ですよ」

老母はちゃんと背をのぼして歩いた。

周子は、電話一本で氷屋からとりよせられる氷をなぜ老母が買いにでたかわからなかったもので、さっきからわけを訊ねようとおもいながら、しかしためらいの方がさきにたった。

左側に彎曲して続いている登り坂の両側には樺の大木がならんでおり、風がたつて

いた。

「ここは涼しいんですね」

「ああ、すこし不便でも、ここはいいですよ」

坂を登る老母の足どりは、周子よりしつかりしていた。

やがて坂道の左側の鉄の門の前まで来た。門の向うには、周子が数年も前にみられた赤煉瓦あかれんがの二階建の洋館が静まりかえっていた。老母が門の左側の小さな鉄戸を押し、続いて周子が入った。

「あたし、ここで失礼しますわ」

周子は、勝手口の前で氷を老母に手渡そうとした。

「まあ、あがって、ひとやすみしていらっしゃい。紅茶が冷してありますよ。周子さん、すみませんが、その氷をその流し台においてくださいな」

老母はハイヒールを脱ぐと、周子にもあがれといい、食堂に入って行った。周子は氷包みを乾いたタイル張りの流しにおくと、冷蔵庫をさがした。

「ここへきておかけなさい。冷蔵庫はこっちの方ですから、わたしがいれますよ」

老母は食堂の椅子いすに坐って声をかけた。

周子が食堂に入ると、そこはひんやりしていた。一時にからだの汗がひっこんだ。

「いま、紅茶をいれますから」

老母は椅子からたちあがると、食堂をでて、流し台の左側の廊下に姿を消した。

周子は食堂の壁にかかっている絵をみあげた。底のふかい皿に盛った栢榴ぎゅうをかけた油絵で、部屋の暗がりでは絵も沈んでいた。

老母が紅茶をいれたコップを二つ盆にのせてはいってきた。

「さ、召しあがれ」

老母は盆を細長い食卓の上におくと、コップをひとつとりあげた。周子もコップをとりあげ、紅茶をひとつくち飲んだ。甘く冷い液体がのどを伝ってはいった。

「おいしいわ」

「おかわりをしなさい。そうそう、昨日焼いたお菓子があったわね」

老母は再び椅子からたつと、食堂をでて行った。そして白い陶器皿にケーキを盛って入ってきた。

牛乳をたっぷりつけたケーキは、周子のくちのなかでやわらかくとけた。

周子が老母についてフランス語を習いに通った時分、邸では、婚期を逸した老母の

二人の娘がいるきりで、上の息子^{むすこ}は京都の方の大学に助教授として行っていた。

周子は老母の三人の子供達のその後の消息を訊^きこうとして、やめた。そして紅茶を二杯飲み、ケーキを二つたべてから、老母に別れを告げた。老母は勝手口までおくってくれた。

周子は鉄門をでて坂道を降りながら、二人の娘はあるいは結婚したのだろうと考えた。息子は関西に行ききりだし、すると老母はさびしい日をおくっているわけだな、でも、あの薄化粧をほどこした顔と端麗な歩きかた、洗練された洋服の趣味は、もう六十五はすぎているはずだが、とてもそんなしにはみえないな、周子はこんなことを考えながら坂を降りた。

坂を降りると、再び真上から太陽が照りつけた。

休暇に入っている小学校の庭はひっそりしていた。校庭のかたすみには雑草がしげっておりその近くにはカンナの花が赤くもえていた。周子が川沿いの道にでた頃には、また顔から汗がふぎだした。背中と太股がじっとり汗ばんでくると、やがて汗が流れるのがわかった。周子は早く家にもどり水を浴びたかった。

「あら、周子さん！」

とよばれて周子は顔をあげた。

白地にピンクの水玉模様をちらしたワンピースを着て、黄色の日傘をもった道子がたっていた。

「ずいぶんながい歯医者なのね。待っていても帰りそうもないから、いま失礼してきたところよ。小母さま心配していらしたわ」

「あら、すみません。途中でおもいがけない人にであい、その家にあがっていたものだから。そういえば、きょうあなたがみえる日だったのね」

「いやだ、この人、忘れていたの」

「そういうわけじゃないのよ。ごめんなさいね。家をでるとき曇っていたから、あたし、日傘をもってでなかったのよ。あつさで頭がのぼせていたのね。帰りに川辺のおばあさまにおあいして、そこで紅茶をごちそうになってきたの」

「川辺のおばあさまって？ ああフランス語を教えていらしたお方？」
道子は日傘を周子の上にさしながら訊いた。

「そうよ」

「あなた、なにか間違いじゃないの？」

「なにが……」

「だって、あら、このひと、きつとどうかしているわ。あのおばあさまは去年お亡くなりになったのよ」

「あら、そんなはずないわ。いまおあいしてきたんですもの」

周子は答えながら、道子の目が驚愕で変っているのをみた。周子は道子の目をみているうちに、腋のしたを冷い汗がながれるのを感じた。

「周子さん、どうしたのよ。こんな近くに住んでいながら、それを知らないなんておかしいわ。しっかりしてよ。あそこに娘さんが二人いたでしょう。あの人達、いま、あたしの家の近くに住んでいらっしゃるのよ。そしてあそこのお家は、いま、売りにでているのよ。あら、いやだ、このひと、顔が蒼いわ」

それから周子は道子に腕を抱えられて自宅にもどりながら、そんなはずはない、わたしはたったいまあのお母と紅茶を飲み、ケーキをつまみ、はなしをしてきたのだとおもった。